

---

# あーるぴいじい

三毛猫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あーるぴいじい

### 【Nコード】

N0821BA

### 【作者名】

三毛猫

### 【あらすじ】

コンピュータRPGのようなレベルという概念が、もし現実の世界に存在していたら……？ そんな感じのお話。以前texponにて公開していました。現在pixivでも一部公開しています。

## 耳年増なオシナノコのお話（前書き）

連載小説形式になっていますが、このお話は世界を描くことを目的としているため、基本一話完結の連作短編という形になる予定です。今後どうなるかは今の所未定ですが、主人公（語り手）が変わったり、語られる時系列が前後することがありますのであらかじめご了承ください。

## 耳年増なオンナノコのお話

目が覚めてすぐに、目覚まし時計のアラームを解除した。

「……よし。今日も目覚まし鳴る前に起きた」

あたしは大きく伸びをして、ベッドから飛び降りた。

これで、五日連続で早起きに成功だ。

小さな達成感を感じながら制服に着替えようとパジャマのボタンに手をかけたところで、ふいに頭の片隅でぴろりん、と小さな鈴が転がるような音がした。

もしかして……！

あたしは慌てて机の上のスカウターを左耳に装着した。電源をONにすると、ぴびぴ、と小さな電子音がしていくつかの数字がディスプレイに表示される。

「やった！ 早起きスキル上がってる！」

表示切替のボタンを何度か押すと、早起きスキルのアビリティとして”目覚まし時計”<sup>ウエイク・アップ</sup>が使用可能になっていた。

「うふふふ。これで深夜アニメ見放題だわ！ このアビさえあれば、絶対に朝起きられるんだから」

これで、寝坊して遅刻することなんてなくなる。

あたしはうん、とひとつ胸を張って、にこやかな気分でパジャマを脱ぎ捨てた。

全ての生きとし生けるものにレベルという概念があることが世に知られたのは、まだそれほど昔のことじゃない。

アフリカの奥地のある部族に伝統的に伝わってきた儀式が、ある人類学者によって世に公表されたときには、その既存の概念を覆すあまりの内容にほとんど見向きもされなかった。

その儀式というのは、特殊な薬草を使用すると額や手の甲にその人間の格が模様として浮かび上がり、その格が一定以上の者を成人として認めるというようなものだったらしい。

近代に入ってその薬草の成分が科学的に効果があると証明されてから、コンピュータゲームのRPGにちなんで、いわゆるレベルという概念が一般的に広がった。もともとコンピュータゲームとは違って実際に生きている人間のレベルなんか目で見ることはできないので、現代ではスカウターと呼ばれる特殊な機械を使用して自分や他人のレベルを知ることができる。

かつての儀式ではレベルしかわからなかったのに対し、現代の科学によるスカウターという機械は、その人間の持つ技能までもスキルやアビリティという形で表示できるようになっていった。

あたしの持っているスカウターは、亡くなったひいおばあちゃんから受け継いだ、だいぶ古い型のものなのだけれど、ひいおばあちゃんが得て来たいろいろなアビリティの記録が残っているので、次にどんなアビリティを習得しようかなと迷ったときにいろいろ参考になるので重宝している。

最新型だと一応そういうライブラリなんかも充実してるらしいのだけれど、あくまで一般化されたものでしかないので、世に数千万あるといわれるスキルやアビリティ全てを網羅しているわけではないし、あるスキルを伸ばした結果必ずしもデータ通りにアビリティを得られるとも限らない。遺伝的に特定の家系にしか発現しないスキルというものもあるらしいし、遺伝的に親族のデータの方が信頼できるのだ。

データを最新機種に移植できたならよかったのだろうけれど、さすがに戦時中に作られた機械には現代のものとはほとんど交換性が無かった。もともと互換性があつたとしても、今では顔に片メガネのように装着するタイプのスカウターはほとんどないので、このタイプが気に入っているあたしは新機種に乗り換えようとは思わなかつただろう。

最近では携帯電話と一体化したカードタイプのものが主流で、古いごついタイプの装着型を使用しているあたしは結構めだっているのかもしれない。でも、やっぱりスカウターっていったらこの形だよね、って思うのです。

「ねえみっちー、聞いて聞いて！ あたし今朝あたらしいアビげつとしたの……よ？」

いつもの待ち合わせ場所に先に来ていた美知子に気がついて、声をかけながらあたしは微妙に違和感を感じて首をかしげた。

「なんだろう。昨日までの美知子とは、どこか違うような気がする。おはよー、マイ。あんたのことだからどーせ、しょうもないアビなんだろうけど。見せてごらんなさい」

美知子は、小さく笑ってカード型のスカウターの電源を入れた。美知子から赤外線通信でステータス閲覧の許可を求められたので許可をしてもう一度美知子の顔を見つめる。なんだろう、この感じ。何が違うのかははつきりとわからないけれど、昨日までの彼女とはどこか雰囲気が違う。

「目覚まし時計、ねえ……。こんなの無くたって、朝くらい普通に起きれるんじゃない？」

美知子は、小さく鼻で笑って肩をすくめた。その様子さえ、なんだか役者のように様になっている。

「……ねえ、みっちー。もしかしてあんた、レベルあがった？」  
美知子は魅力系のスキルやアビリティを伸ばしていたはず。全体的に底上げされるとしたら、レベルが上がったとしか考えられないでも……。

「あら、スカウター見なくてもわかるものなのねえ」

美知子は人差し指を唇にあてて小さく笑った。

「え、みっちー、先週レベルあがったばかりじゃない？！ いった

たいどうしてもうレベルあがっちゃったの？」

あたし達くらい年齢だと、だいたいレベルと年齢は一致するものなのだ。逆に言うところレベル上がるのにはだいたい一年くらいかかるのが普通で、先週レベル上がったばかりの美知子が、もう次のレベルになっちゃったなんて信じられない。

そんなすごい経験なんて、……あ。

「みっちーあんたまさか！」

「もー、ほんとマイは勘が良くてこまるわね？」

「うわー、うわー、うわー。え、まさか、ほんとにやってしまわれたのですかみっちーさん？」

「……相手だれなの？」

「タカシよ、タ・カ・シ。あいつ俺は三十までドーターを守り抜いて魔法使いになるんだー！ とか愉快なこと言ってたじゃない？ 嫌がらせついでに、わたしの経験値になってもらったってわけ」

「あー、そうなんだ。へー、そうなんだ。ふーん……」

タカシ君……か。

可哀想に……。あんなのはただの不名誉な称号に過ぎないのに、本気で魔法使いになれるって信じてたみたいだから、人生の目標を叩き折られた彼はすごいショックを受けたんじゃないだろうか……。

「ねえ、みっちー。あんたタカシ君のこと好きだったの？」

「え、べつに？ 嫌いじゃないけど、特に好きでもないわね。同年代のオトコならどれでもたいしてかわらないんじゃない？」

「うわー。あたしはそういう考え出来ないな。たくさん経験得られるからって、好きでもない人とそんなことって……」

「だって来年は受験じゃない？ ちよつとでもレベル高い方が有利なんだしさー。マイもたぶん、そのうちそんな甘いこといってられなくなるわよ？」

美知子がそつとあたしのそばに近づいて、耳元に顔を寄せてきた。……それとも、わたしとイケナイことしちゃう？ 女の子同士で

も意外にいい経験になりそうだし？」

「うにゃー!!」

あたしはあわてて美知子から距離をとった。

「あたし、のーまるだから！」

「あら。ちよっと、残念」

ペロリと舌で唇をなめまわす美知子が、とても怖かった。

結局その日は一日中、美知子とタカシ君のアレな関係に想いを馳せてしまつてまつたく授業に身が入らなかつた。

タカシ君は、今日は一日中頭を抱えて机にうつ伏していた。ときおりすすり泣くような声が聞こえてきて、俺はもう魔法使いになれないかもしれない、と虚ろな瞳でぶつぶつとつぶやいていたのが印象的だつた。

「ご愁傷様、というかむしろ早くにドーテー捨てられたのなら勝ち組なんじゃとも思つたけれど、彼にとってはとんでもない災厄だつたらしい。」

彼のステータスを確認したわけではないのだが、本人が望まなかつたにせよ、やはり男女間のアレコレというのはものすごい経験だつたらしく、タカシ君のレベルも上がっているようだつた。

みつちーとタカシ君が具体的にどんなことをしたのかは教えてもらっていないけれど、レベルが上がっちゃうくらいの経験というのは、やっぱりものすごいことをしちやつたんだらう。

アレとか、あんなのとか、もしかしたらXXXXなことでまでやつちやつたんだらうか。

タカシ君が自分からみつちーに何かしそつには思えないから、やっぱりみつちーからあーんなことやそーんなことをしちやつたんだらうか。

みつちー、どんだけ無理やり迫つたんだらう……。

あたしはそこまでしてレベルは上げたくないなつて思つたけれど、

まったく興味が無いことでもないので、どんな状況なら許せるかな、どこまでなら許せるかな、とついつい妄想に耽ってしまっていた。うわー、うわー、うわー。

思わずピンク色の妄想で頭が埋め尽くされてしまって、顔が真っ赤になった。

ぴろりん、と小さな音がして、妄想スキルが上がった。

称号・耳年増をげっとしてしまった……。

夜、寝る前に”目覚まし時計”のアビを使用して、お布団に入ってからもしばらくは悶々として眠れなかった。

みっちー、大人の階段あがっちゃったのかー。

どんなことしたんだろう……。あんなこととか、そんなこととか、しちゃったのかな。

あたしだったら、アレはできないな。アッチならやってあげてもいいかな、なんて寝返りをうちながら妄想していたら、ふいに頭の片隅でちゃらーちゃーらーちゃーらーちゃーとファンファーレが鳴り響いた。

「……え？」

慌てて布団から飛び出て机の上のスカウターを装着する。

電源をONにして確認すると、あたしのレベルが上がっていた。

「妄想でも……けっこー経験値はあるんだ……？」

あたしはひとつ賢くなった。

……っていうかあたしの妄想はレベル上がったっちゃうクラスなのか。うわーはずかしい……。

## 耳年増なオンナノコのお話（後書き）

作中における簡単な用語解説

レベル：

簡単に言うとその人の総合的な強さなどを数値で表したものです。

作中においては全ての生きとし生けるものにこのレベルという概念があります。

取得した総経験値が一定の値になることにより、レベルが上昇します。

レベルが上昇することにより、スキルやアビリティに補正がかかる設定です。

このため同じスキル値であってもレベルの高い方が効果が上がります。

アビリティ：

スキルを伸ばすことにより習得できる特殊技能です。

とはいえ、作中におけるものは現実に即しているので

実のところ大して特別でも特殊でもありません。

端的に言うと、「タマゴを片手で割ることが出来る」とかそんな感じですよ。

ものすごく地味です。基本的に人間が素で出来ることしかできません。

びっくり人間コンテストに出られるようなアビリティは、

よっぽど努力しない限り普通の人間には習得できません。

超能力や魔法のような超常の特殊技能は基本的に存在しません  
が、

虫の知らせなど極一部、超常的に思える特殊技能は存在します。

スキル：

技能です。ある技能についてどの程度習熟しているかを数値で表したものを、

作中ではスキル値といいます。

端的に言うと、

英検3級だとか剣道5段みたいなものが目に見えるところまで  
ください。

作中においては経験値はスキルに対して蓄積されます。

蓄積された経験値が一定の値になるとスキル値が上昇し、

アビリティを覚えたりなんらかの称号を得たりします。

スカウター：

その人のレベルやスキル、アビリティを調べるための機械です。

基本的には自分の強さを調べるための機械ですが、

他人の了承を得るとその人のレベルやスキルも調べることが出  
来ます。

戦闘力たったの5か、ゴミめ……。なんてDBごっこも出来ま  
す。

経験値：

生きていくうえで全ての経験を数値で表したものです。

ただ生きているだけでも、

日々のなんでもないことで経験は積み重なっていきます。

初めて行う行為には大量の経験を得られます。

称号：

作中においては特に何か効果があるものではありません。

いくつかのスキル値が一定以上の値になった場合や、

所定のアビリティを習得した場合に得られることがあります。

## 魔法使いになりたいオトコノコのお話

クラスメイトの高橋貴志くんは、ちよつと「お馬鹿」だ。

ただの馬鹿でもカタカナでバカでもなく、「お」をつけて「お馬鹿」なのは、彼が愛すべきお馬鹿さんであるからに他ならない。

あるいは、馬鹿という言葉が良くない響きを与えるいうのであれば、馬鹿がつくほど純粹なのだと言ってしまったもいい。

……あれやつぱり馬鹿がくつついてる？

とにかく、小学校の低学年そのまま体だけ大きくなってしまったような、というかちよつと端から見て「大丈夫かこいつ？」と思ってしまうくらいにバカっぽい（ああまたバカって言っちゃった）、人を疑うことを知らない純真な少年なのであった。あたしのクラスメイトは。

その一例をあげると、彼は未だにサンタクロースの存在を信じている、らしい。

……中学二年生にもなつて、だ。

そのことを知ったとき、あたしは”両親イイカゲンに正体バラせよっ！”って、思わず見たことも無いタカシ君のご両親に裏拳でツッコミを入れてしまった。この歳になるまでまったく疑われること無く毎年続けられるというのは、賞賛を通り越してその無邪気さが薄ら寒くすらある。

タカシ君もご両親も、大丈夫かほんとに……。

……ちなみにあたしがサンタの正体を知ったのは、小学三年生のとき、親友の美知子に「あんたまだサンタなんか信じてんのー？ わらっちゃんー」と盛大にネタバラシされてしまったせいなのだけれど、そのことが無かったってまさか中学二年になるまでサンタを信じるようなことはなかっただろうと思う。……いえ9歳でも遅いかいっつ突っ込みは無用ですよ？

その愛すべきお馬鹿さんであるタカシ君とは、今年初めて同じクラスになった。

彼は女子としてもあまり身長の高い方でないあたしよりやや背が低く、くりくりとした両目はいつも何か面白そうなものを探しているようにきよるきよるとしている、なんだか小動物のような男の子だった。オトコノコに対してはあまり褒め言葉にならないとは思うけれど、初めて見たときの感想は「なんかちっちゃくて可愛い」という感じだった。

ところが始業式後のHR、自己紹介の場で教壇に立った彼はその愛くるしい顔ににこやかな笑みを浮かべてこう言ったのだ。

「魔法使いにツ、俺はなるッ！」

びしい、つとおそらく彼がかっこいいと自分で思っているであろう奇妙なポーズで、まるで海賊王に俺はなる！と言い放つ麦わら帽子のゴムの人みたいなノリで、そう言い放ったのだった。

まさかこれがウワサの中二病というやつなのだろうか……？

中学二年生になったとたんに発病するなんて、なんて律儀なおトコノコなんだろうと思ったのもつかの間。教室を見回すと、一年生の時に彼と同じクラスだったらしい何人かが、ふうやれやれと肩をすくめるのが見えた。どうやら彼を知っている人たちにはおなじみのセリフであつたらしい。

「ほう、高橋は魔法使いになりたいのかー」

担任の矢野先生が苦笑混じりにタカシ君をみつめると、

「はい、せんせー！ ドーテーのまま三十歳こえたら魔法使えるってほんとっスかっ？ せんせ独身だし三十こえてるよな？ なんか魔法使えないんですかっ？」

タカシ君はキラキラとした眼差しで矢野先生をみつめかえした。

あー、なんだこいつは。とあたしが思ったのも一瞬のことです。

「おお、見たいか高橋。んじゃちょっとだけ見せてやるうな！」

どうやらノリがいいらしい矢野先生がそんなことをのたまったの

で、あたしは頭を抱えた。

魔法使いなんて、ネット上で言われているただの不名誉な称号であって、いくらレベルやスキルというものが現実に存在する世の中ではあっても、魔法なんてふざけた技能の存在は今の所確認されていないのだ。

全ての生きとし生けるものにレベルという概念があることが世に知られてから、まだそれほどの年月は経っていない。レベルという概念自体が発見されたのはかなり昔のことであつたらしいのだが、その既存の概念を覆すあまりの内容にまったく誰にも相手にされなかつたのだ。

とはいえ、昔から「格が違う」という言葉があるように、その道においてそれなりの技量を持つ人同士ではある程度お互いのレベルを見分けることが出来ていたのだろう。

そういつた下地があつたせいか、レベルというものが存在することが科学的に証明されてからは、意外にすんなりと世間には受け入れられてしまつたのだつた。

スカウターと呼ばれる機械で定量的にレベル、スキル、アビリティといったものを調べることが出来るようになった現代では、数年置きの国勢調査で全国民のアビリティやスキルなどを調査される。その結果、スキルやアビリティの種類やどれを習得している人が多いかなんていう傾向なんかが発表されるわけなのだが、もちろんそこに魔法使いなんてスキルも載っていないければ、魔法なんてアビリティも載ってはいない。

載ってるのはせいぜい手品スキルくらいだろうと思う。英語だどっちもMAGICだけだね。

ある意味、魔法や超能力といった超常現象がこの世に存在しないことは、科学で証明されてしまつたのであつた。

……余談だけど、幽霊が存在することは逆に科学的に証明されち

やったらしいよ？

……まあ、そういうわけで。あたしは矢野先生が何をしようがそれは手品の一種でしかないということをはじめからわかっていたのだけれど、タカシ君はどうやらそうではなかったらしい。

タカシ君に期待の眼差しで見つめられた先生は、にやりと笑いながら左手をぐっと握り締めて、手の甲を下に向けた。そして握り締めた手をぱっ、と開いた瞬間、先生の手の平から、ぼっ、と一瞬炎が上がった。

「すっげー！！ 炎の魔法か？ メラか、ファイアなのか？」

タカシ君が感嘆の声をあげ、教室もざわざわとざわめきだす。

ふう、いい仕事したな、とばかりに額の汗を拭う矢野先生。

「どうだー。俺はオチコボレだからこのくらいしか出来ないけどなー」

うちのクラスで先生のあだ名が矢野・ザ・ウィザードに決定した瞬間であった。

……もつともあたしは先生が左手に隠したライターの頭の部分で、燃えやすい化繊のワタに着火したことは見抜いていたので、それほど驚きはしなかった。

オチコボレと言っただけではいたが、手品師としてはそれなりに修行を積んだと見えてその手際はなかなか鮮やかな物だった。矢野・ザ・マジシャンとなら呼んであげてもいいかもしれない。

……なんて思っていたら。

「せんせ、どうやって魔法使いになったんだ？」

「んー、三十歳の誕生日の夜にだな、奇妙な白い獣がやってきてボクと契約して魔法使いになってよ！」とか言ってきたんでなー、ちよつとだけ魔法使いやってみた」

先生はおそらく冗談のつもりだったのだろうが、どうやら元ネタを知らなかったらしいタカシ君は、その言葉を鵜呑みにしたらしい。

「すっげー、いいなー。俺もはやく魔法使いになりたいなー！ 白い獣こないかなー！」

とおおはしゃぎしたあげくに、クラスのみんなの「やれやれ」という空気に気がつくことなく「お馬鹿」をさらしたのであった。

こうしてタカシ君は、「俺は三十までドーターを守り抜いて魔法使いになる！」と、ことあるごとに叫ぶようになってしまったのでした。

「冗談でやったつもりだったのに、すっかり信じ込んでしまった様子に先生もちよつと困ってしまったようで、ただ苦笑いをするばかり。その後、あたしを含めた教室の皆は、ただ生暖かい目でタカシ君を見守ることに決めたようだった。

……ただ、一人を除いて。

しかし、タカシ君はドーターって意味わかって叫んでるんだろうか……。

彼のことだから、コウノトリとかキャベツ畑だとかを信じてたとしてもおかしくはなさそうなんだけど……。

ふと彼の方を眺めると、タカシ君は子供向けの魔女っ子モノの魔法のステッキを振り回しながら適当に魔法の呪文らしきものを唱えていた。

……うん、やっぱりお馬鹿。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0821ba/>

---

あーるぴいじい

2012年1月1日23時53分発行